

木の葉のように焼かれて 名越 操

昭和 20 年 8 月 6 日。私は 15 才だった。毎日学徒動員で、マッチ工場ではマッチ棒揃え、糧秣廠では缶詰磨き、被服廠ではボロ布れのよりわけ、まともに学校に通ったのは女学校の 2 年まで、青春などはなかった。いよいよ戦争も末期になって、老若男女を問わず銃後の守りに狩りだされた私たちは、学校の教室にそれぞれの家庭のミシンを供出し、朝から晩まで、軍隊の蚊帳を縫い、袴下を縫い、物もいわず、笑わず、みんな泣きもしなかった。

それから、アメリカの B29 爆撃機の空襲が、教室の窓からみえるようになって、私たちの仕事は日本製鋼での弾丸づくりに変わっていった。

朝勤、昼勤、夜勤、暁勤の 1 日 4 交替のぶっ通しで、休みなどというものはなかった。何千、何百、何十万という日本中の少年と少女が弾丸をつくった。

なぜ、泣かなかったのだろうか。

なぜ、訴えもしなかったろうか。

エメラルドの 5 月の色などは、覚えてもない。

みんな黒焦げた丸太棒のように、パシパシに乾いてうずくまって戦争の道を転がっていった。

そして、もう戦争は、弾丸づくりだけでは間に合わなくなっていた。

私たちも兵隊とおんなじに、簡単な試験と、訓練をうけ、敬礼をし、捧げ銃を習って、いよいよ明日から、広島第二総司令部に配属されるという日。

選ばれたという僅かな誇りがあったようにも思うし、もう、そんな気概などなくなっていたようにも思う。

8 月 6 日、朝。

青い空だった。みんなが出払って、私と祖父は、B29 の爆音をきいた。音がだんだんと不気味に近づいてきて、もうどうしようもないと思った瞬間、物凄い轟音と共に、赤い黄色の粉が炸裂した。とうとう落ちたのだ。とうとう私のところに爆弾が落ちた、私はやられたと思った。

外にいた私は爆風で飛び家の中でうつぶせになり、柱や、屋根が背中に落ち、畳に血が流れた。どこを、怪我したのかわからなかった。夢中で祖父を呼び倒れた屋根の上で足がふるえた。

隣の家の屋根は燃え上った。

火の手に追われ、追いつめられて山に逃れた。みんな爆弾が自分の家に落ちたと思い、家中がみんなバラバラになって、髪を逆立て、自分の皮膚をぶらさげ、わあわあわめき、叫び、泣きながら山に上った。

広島市中に黒煙がふき上り、空を覆って、天に上り、真黒い重油のような雨が降った。一瞬のできごとだったと思うのに、山を下りたときは午后の 3 時だった。

父や母や、姉や妹も、みんなバラバラになってしもうて、家がやけて、なにも彼も灰になり、まだ熱い焼跡に立って、私の心も灰のように焼けた。

それぎり、妹は帰ってこなかった。女学校の一年生で、原爆の爆心地の真下に、政開作業の動員に出ていた。

朝は元気ででて行ったのに、爆風で、お寺の壁の下敷になって死んでいた同級生や、水槽の中で片足しか残っていなかった生徒。

名もなく、道もなく、青春もなく、勲章ももらわずに、みんな、木の葉のように焼かれて、消えていった。妹は死んだ 20 万人の中にいるのだろうか。

逃げおくれ、はみでて、そこいらに忘れ去られ、ペンペン草にでもなっていようか。

着物は焼きはがれ、丸様でふくれあがり、名を告げる力もなく水を乞いながら、海に流れていったのか。生きながら、からだ中、ウジ虫がわいて、どこの誰かもわからずに、焼き捨てられてしまったのだろうか。

妹は、この世の中になにも残さずに消えていったままなのです。

おいしいお菓子も食べられなかった。1 月に 2 日分のお米の配給で、後の日は何を食べていたろうか。仏壇にあげるおはちのお下りも競争して食べた。幼くて、集団疎開していた弟達は、一粒の大豆を、皮を食べ、2 つに割って、芽を食べ、それから半分ずつ惜しみながら食べたという。みんなみんな、私たちは貧しくて、侘しくて、疲れ果て、泣く涙もなかった。

一体、何のために、誰のために、戦争をしているのか。一体、誰が戦争をおこしたのか、考えもしなかった。

何も見ないで、何も聞かないで、何も言わず、何も疑わず、追われる小羊のように私たちは戦争にかりだされていきました。

そして原爆が落ちたのです。

でも、もう私は絶対に戦争はごめんです。

(1964 年第 1 集より)